★紫式部
羞恥の露出ＡＶ
初体験♥♥♥♥
18禁
成人向け
Adult Only

目次（下）

1p　幕間の出演者コメント
4p　ドスケベを解放せよ！　アダルトコーナーレジ前公開オナニー
25p　アへりすぎて美女崩壊、腰へコディルドオナニーショー
44p　エピローグ

幕間の出演者コメント

ひゃっ、は、はいっ！　よ、よろしく、お願いします……香子です、か、カオちゃんと呼ばれてい、ます……。
私のドスケベぼでぃぺいんと徘徊映像ッ、い、いかがだったでしょうか……ッ
こ、このデカパイをゆっさ、ゆっさして歩き回る私の露出映像、一緒に見てみましょう、ねっ。

こちら、マーケットに入ってすぐの場面、ですっ。
こちらの水着は……はい、私が自分で用意したものと同じデザインで……え、ちっ違いますっ！　声をかけられたくってこんな格好をしたのではありませんッ！　だ、断じて、違うんですっ。
え、あッ、そ、そんなに……ッ！　あ、すみませんつい……こ、こうやって見てみると、その、お、おっぱいだとか、ちくび、だとかッ、全然、隠せていない、ですねッ。
皆さん、結構……しっかりとわた、わたしのおっぱいを見て……ッ！　こんな、こんな姿が記録に残るだなんてぇ……。
あ、ああ、後ろ姿、ですね。
後ろは……ッ！　こんな、皆さんこんなに、じ、じっくりとわたしのお尻……ッ見ていらしたのですか……！
これっ、も、もしかして写真機という……ッ！　そ、そんな、じゃあわたしの、裸ッ、皆さん記録されて……ッ？
は、い、いえ、いえッ！　決して、けっしてそんな……ドキドキなどしておりませんっ、お、おりません……。

つ、次のシーンです……これは、お、お客様に商品を拾っていただく所……ッ！
ああ、し、しんじられないっ、こんなにおっぱいを揺らしていたなんて……お、お客様もこんなにじっくり、お、おっぱいを凝視していてッ……。

って、あ、ちょ、ちょっとコレ……ッ！　違うんです、コレは、その……うぅぅぅッ……。
はい、そ、そうです……この、床にぽたぽたと溢れるおツユはその、わ、私のえっちじゅうすです……ッ！
香子、皆様には、裸同然の格好を見られて……ッ！　股を濡らしておりましたッ！
はッ、はぁッ、乳首もッ、ご、ご覧の通りこんなに……カチカチにさせていて、い、痛いくらいに張り詰めておりましたぁっ。
見られてるかと思うだけで、身体中暑中のように燃えて燃えて、たまらなく疼いてしまいました……ッ。
おツユでお店を汚してしまいまして、えっちな娘で申し訳、ございませんでしたぁ……。

え、あッ、コレッ……だめ、お願い……こんな姿ぁ……ッ。
い、言わなきゃダメ、ですか……うぅぅぅっ。
こちら、こちらぁ、香子が皆様にぐちゃぐちゃ手マンされているシーンにございますぅッ。
お友達にドスケベがばれてしまわないようにッ、必死にアクメを我慢しておりましたッ。
こんなに、こんなに乱れてッ、おっぱいもお尻も揺れていて……ドスケベじゃないはずが、ないんですけどもぉ……か、
香子、頑張って耐えていましたッ。
か、身体中びしょびしょでぺいんとが溶けて……ほ、ほとんどすっぽんぽんでイかされてしまい、ましたねぇ。
ゆ、床もこんなに濡らしてしまって……ッは、恥ずかしく、なかったんでしょうかねッ。
最後……お、おまんこもアナルもピクピクさせてッ、お、おっぱいみるくまで吹き出してみっともないアクメ、しちゃいましたッ
お友達がいなくなって……気持ちが緩んじゃって……は、はい、おまんこも緩んじゃいまし、た……。

さ、さあもうちょっと見ていたいところですがッ！
時間が近づいて参りましたので、つ、次の企画に移りましょう。

次の舞台はこちら……じゃ、じゃじゃぁ～んっ。
あ、アダルトコーナーでのお買い物チャレンジぃっ！
どうで、しょうか……ッぺいんとを洗うついでに、と、私のおっぱいにタイトルを書いちゃい、ましたぁっ！
すけべなだけのデカパイっ、か、書きにくくってすみません……っ。
私香子がお送りするドスケベ徘徊映像後半はぁッ……の、ノーブラノーパンＪＫコスプレでお買い物にくりだしちゃいますッ！
購入するお題はこちらに……え、こ、こんなに？
……ごほんっ、こちらのメモにあるものを全て買ってきたらクリアーですっ！
買い忘れたり、途中で露出プレイしている変態だと見つかってしまったら、恐ろしい罰ゲームが与えられるので……頑張って見つからないようにします、ね！

それでは、い、行って参りますっ！

え、そ、それ言うんですか……ひッ、い、言いますッ！
お、おまんこ濡れ濡れ乳首ビンビンッ！
変態露出狂の香子ッ、出陣ひますぅッ！
うう……。

3章　ドスケベを解放せよ、アダルトコーナーレジ前公開オナニー

「だからさァお客さん、無理なんスよぉ。お客さんにそれ売っちゃったらうちらが捕まるンすよぉ？」
「だ、ダメなんですか……ッ！　どうして？　お、お金はしっかりお支払い致しますのでどうかッ！」
ひょろ長いレジうち店員が「いやァお金あってもなァ」と頬をかく。
紫式部はわたわたと手をバタつかせ、スタッフから渡された財布を差し出した。しかし「いやいや」と押し返される。
スタッフから出された新たなチャレンジは、コスプレ姿でアダルトコーナーのオモチャを購入してくること。
ノーパンノーブラ、しかも式部の尻に乗っかりそうなほど短いスカート姿とあっては迂闊な動作は禁物だった。先程のように無造作に背伸びをすれば、へそまで見えるトップスから乳房がぼろりとこぼれ落ちるに違いなかった。
その先程の時点では、スカートもトップスも、果てはパンツすら履かせてもら得なかったのだから、まともに近い服装を許された今はまだましなのかもしれない。そんな式部の予想通り、買い物は何事もなくスムーズに進んだ。メモの文面に視線を何度も走らせて、一つとして間違うまいと確認してカゴに入れる。
アダルトコーナーでカゴ二つ分も買い漁ることなど滅多にないことなのだが、そこは式部本人の無知が功を奏した。少ないながらも布地に守られているという心の余裕が隙を生み、式部は他の客からジロジロカゴを覗かれていることに気付いていなかった。
太ももに尻にへそ、それらを惜しげもなく晒して歩く黒髪美女が、両手のカゴ一杯にエログッズを詰め込んで歩く様。エリア内のほとんどのスマホ写真フォルダにその姿が保存されたのは言うまでもない。
「これで……よしっ、ふぅ。今回は無事に済ませそうです……」
周囲のざわつきには目もくれず、式部はメモをもう一度読み返した。購入品目は全て揃った。間違って罰ゲーム、などと

いう憂き目に会うことはないと確信する。
ずっしり重いカゴを持ち上げて、式部はレジなる会計所を目指す。
そうして会計台にカゴをずしんと置いたその矢先、紫式部は予想外の「売却拒否」を受けたのだった。
「もっ、もしかして数が多すぎたのでしょうか！　すすっ、すみませんっ！　それでしたらええと、一旦こちらの籠は待って頂いて、先にこちら一つだけお支払いという訳には……」
「そうじゃなくってですねえ……えっとお客さん、アンタ自分がどんな格好しているかわかってンすか？」
目をぐるぐる回して慌てる式部の慌てように頬をかいた店員が、式部を指差して言った。
「格好？」と式部は自分の身体を見下ろした。確かに露出は（普段の式部からすれば）かなり多い。だがこの程度であればカルデアのサーヴァントなら山程アウトになっている所だ。露出徘徊で麻痺しかけているとはいえ、式部の感覚でもギリギリセーフラインな服装……であるはずなのに。
「な、何か問題があるんでしょうか……確かそう、カスタムセーラー服と言いましたね。ど、ドレスコードというものに当てはまっていないのですか？」
「いや、まあエロコーナーのドレスコードにはピッタシかもっすけど……え、マジで言わなきゃわかんないヤツっすか」
店員と式部、お互いに顔を見合わせて「？」を投げ合った。
店員が式部の胸を指さして、少し「フヒヒ」と笑って、言った。
「お客さんソレ学生服っスよ？　エログッズを未成年に売るのはうちらダメってなってるんスよ」
「が……くせい、服……ッ！」
式部の「？」が「……」となり、そして「！」に変化する。ぼッ、と緊張が顔に膨れ上がり、真っ赤な湯気を立ち上げる。
紫式部は知識程度にしか知らなかった。現代ではセーラー服は未成年の証、アダルトアイテムの購入には相応しくない格好なのだという事を。

「すッ！　すすすすみませんッ！　違うんですッ！　こッこここれはそう言うんじゃなくって！　わたッ、わたたた……ッ！　ちがう、そうじゃなく……ッ！」

バタバタバタ、と煙が出るのではという勢いで両手を胸の前で降りしきる式部。ただでさえ回りまくっている目が急加速、端正な顔があうあうと可愛らしく悶え、頭上からぽんぽんと煙が上っていく。

恥ずかしい。数刻前までの快感が混ざり込む羞恥とは違う、純粋なポカをした気分だ。

「ごごごごめんなさいいッ！　これ、このセーラー服はこすぷれ、でして！　わた、私自身は成人している身でして……ッ！」

「はあ、あー、へえ？」

ねとっ、とした店員の笑み。

式部ははたと我に返った。自分は今、大声でとんでもない事を言ってしまったのではないか？

身体を値踏みするように、視線が膝から太ももへ上っていく。チラ見えする腰のくびれを通り、制服を破らんばかりの巨乳を視線で揉む。そして最後に、緊張で赤く染まった顔へと行き着いた。

「制服だけど……成人？　どういうことっスかぁ？」

「あ、あの、それは……こ、これは……服はその……ッ」

「ちょっとオお客さん、声ちっちゃくて聞こえないっス。もちょっとはっきり言ってもらわないとオ」

「で、ですから……そ、あ、あぅ……」

咄嗟に何か言い訳を、と考える。だが、無駄だと悟る。

店員の目。式部の肌を舌で舐め回すかのように這いずる視線。ソレは正に、式部を見る撮影スタッフが浮かべていた視線そのものだ。

式部に要求をする目だ。自分たちが納得する答えを出すまでは決して折れない意地悪な意思の現れだ。

彼は望んでいる。式部の潤んだ唇から、とんでもない発言が飛び出す事を。

彼は要求している。「俺が満足するようなコトを口走らないと、コレをレジには通さない」と。

ごくりと飲み込む唾の味。胃から腸から、内臓全てがひっくり帰りそうになる感覚。裸でそこらを歩き回っていた感覚が、式部の肌にびりびりと広がっていく。

「こ、このセーラー服は……ッ！　わ、私が好きでコスプレしている服ですッ！　わ、私はぁッ、こ、あ、アダルトグッズを購入できる年齢です、ので……ッ！　どうか、売っていただけませんでしょうかッ！」

ひきつりつっかえ、式部は言葉を紡ぐ。どれだけ執筆が進まなかった時にだって、これほどまでに言葉に詰まることはなかったはずだ。

一息に言い切った式部は、ふぅふぅと熱の籠った息を吐く。背中に熱い視線が差し込む。がちゃがちゃ騒がしいのは、きっと動揺した他の客たちが商品棚にぶつかっているからだ。先の言葉ひとつだけで、式部の身体はかっかと熱を持ち、とくとくと胸の底で心臓が高鳴り出す。

だが、そんな式部の目の前で、店員はぽつりと呟く。

「アダルトグッズじゃなくて、エログッズっス。それにこんなに沢山買って、ちゃんと使うんスか？」

高鳴った心臓が一瞬、止まるかと思った。口がはく、はくと無意味に開閉する。訂正、質問の類ではない。

「う、うぅ……この、エログッズはッ」

「やり直せ」という命令だ。

「私はッ、コスプレでセーラー服を来ているだけのッ、恥ずかしい大人です……ッ♡　この、エログッズは全部ッ！　私が自分でっ……っッ！　遊ぶ、ために購入させていただきますッ♡」

後ろがまた騒がしくなる。カシャカシャシャッターを切る音が増えてきた。突如始まった羞恥ショーを嗅ぎつけて、客が集まってきたのだろう。

式部はぶるぶる震える肩を抑え、潤んだ瞳で店員を見上げた。店員はといえば「ふーん」とばかりに惚けた顔で立っている。だが式部という美女の口に辱めを刻みつけたその達成感が目に浮かんでいた。同時に「増長」の二文字も一緒に浮かび上がってくるのがわかる。

式部はゾクリと背筋が冷えていくようだった。これまでの商品物色はあくまで前座。このミッション最大の壁はこの男なのだ。

「へーそんじゃ、どうやって使うんスか？　全部ちゃんと説明してくださいよ」

「ぜ、ぜん、ぶ……？」

「あーもちろんちゃんと商品名言ってくださいね？　メモ見ながら選んだみたいですし、お使いってんなら余計売れないんで」

店員はぼりぼり頭を引っ掻きながら言った。逃げ場を閉ざしたと確信したのだろう、惚けた表情から一変、下品に口角を釣り上げて式部に笑顔をむける。

つつ、と式部の頬を汗が伝った。熱い身体から滲み出たとは思えないほど冷たい粒。式部は咄嗟に後ろを振り返った。

カメラを構えていた男たちが慌ててスマホを隠し、わざとらしく近くの商品に顔を背ける姿が見える。10人はいるだろう。式部の公開商品紹介を目とレンズに焼き付けるべく、油ぎった目でチラチラと式部を盗み見ている。

心音が急速に高まっていく。額に汗が浮かび、また冷たい軌跡を描いてこぼれ落ちる。皮膚が張り詰めたように痺れだす。まるで内側から破裂してしまいそうにトクトクと身体中が鼓動する。じゅくり、と興奮が汁となって溢れ出す。硬く勃起した乳頭から、泡立つように沸騰した陰唇から、腺と呼べるあらゆる穴から、抑えきれない昂りが吹き上がり、式部の身体をしっとりと濡らす。

「あー、もちろんこの場で。未成年かもしれない人をバック入れんのはもっとまずいっスから」

店員が更に道を塞ぐ。これまで触れようともしなかった買い物カゴをわざとらしく音を立てて引き寄せる。ざらざらとオモチャをカウンターにぶちまけて、「さあ」とばかりに式部に手を差し出した。

ゴクリ、と鳴らす喉だけがカラカラに乾いていた。

◆

「こッ、こちら……『文学少女の秘メ事 書籍に包まれ濡れる白肌』はッ♡ わ、たしのような女の子がッ♡ と、図書館で露出プレイに耽るという官の、じゃなくて、え、エロ小説です……ッ♡」
「ふ、ふーん、ふひッ、それじゃアンタ、このイラストみたいに近くにヒトがいるのにオナニーとかしちゃう変態女なワケっスね？」
「は……はいッ♡ わたしは露出オナニーが好きでッ♡ この本を読んで妄想をしようと思っていましたぁッ♡」
式部はじっとりと汗が染み込んだ文庫本をゆっくりカゴに戻した。
黒髪の少女が、図書館の物陰でセーラー服を肌けさせている表紙絵のアダルト小説。
店員は「よーくわかりました」とそれをレジに通す。彼が望むような回答ができた証だ。
「買いたいもの、全部ちゃんと説明してくださいよ」
店員のそんな無茶振りを、式部は羞恥の思いでこなしていた。商品名をはっきりと口に出し、使用用途・式部のどんなオナニーに利用するのか、それを式部本人の口で言わせられるのだ。
口に出すどころか、視界に収めただけで赤面が抑えられないようなエログッズの数々。メモを見てカゴに入れる時にはできるだけ目をそらすように心がけていたアイテムたち。
「これはッ♡ 『素人露出娘娘（にゃんにゃん）シリーズ 母校を全裸疾走せよ！』というＤＶＤ、ですッ♡ はッ♡ はッ♡ こ、こんな風にッ、おっぱいを揺すって走ってみたくって……ッ♡ か、買おうと、思ってぇッ♡」
「ふッ、フヒッ、アンタ乳でっかいから揺れそうだよなあ！　それで何カップっスか？」
「ひんッ、え、Ｌカップだと言われ、ましたぁっ」
「Ｌ……ふひひッ！　まじか、は、初めて……ごくッ」
怯えたように涙を浮かべ、式部は即答する。式部の精神上、この男は既に自分よりも上位に立っていた。式部を連れ回した男優たち同様、心が彼に屈服していた。コンプレックスにも近い乳房のデカさをためらうことなく教えてしまうほど、式

部の身体はいいなり状態であった。
震える手がＤＶＤを手放して、かちゃんとカゴに落とす。
店員は鼻を鳴らしてＤＶＤのバーコードを読み取った。
式部は何度目かもわからないため息を吐き、額に浮かんだ汗を拭う。そして、山となったエログッズをじっと見つめる。
（も、もう本もＤＶＤも残っていません……後回しにしていたエログッズだけ……こ、これも説明しなければいけないのですか……ッ♡）
式部は本当の意味でのグッズから逃げるように、比較的親近感の湧く書籍やＤＶＤを優先して選んでいた。タイトルを読み上げるのはこの上なく恥ずかしいものだったが、それでも店員にセクハラな言葉を投げかけられる程度で済んでいる。顔が燃えるように熱くなるのを誤魔化しつつ、切り抜けられるものだった。
だが、エログッズとなればそうはいかない。
「どうしたんスか？　このへんのは買わなくていいってことッスか？」
「え、っと……ッ！　か、買います、買わせていただきますけれ、どぉ……」
意地悪にも店員は式部を急かす。手にしたバーコードリーダーをカチカチ鳴らし、式部を更に追い詰める。
式部は押されるがままグッズの山に手を突っ込んだ。たまたま手に触れた、ゴムのように弾力のあるリングをそのまま引き上げる。太いリストバンドのようなそれは、円の内側にびっしりと凹凸が生えていた。ぐにぐにと押してみると、何かの装置が内蔵されているようだった。
式部は反射的に商品タグに目をやった。
「これ……は……ッ♡『乳首……ッ♡　お、おしおきドーナッツ』っ♡」
「ああ、そんなマニアなヤツも買いたいんスね」
あえて「買うんすね」とは言ってくれない店員。式部が上目遣いで顔色を伺うと、さあねとばかりに肩をすくめられる。
コレをどうやって使うのかと説明するならば、こうやって使うと実証するしか他はない。式部の手は既に、上着の裾を握っ

ていた。汗ばんだ乳房がどくどくと熱くなる。コリコリとセーラー服に擦れる乳首が、顔を出したがってちくちく脳を刺す。

「……ッ♡♡♡」

そして紫式部は硬直した。

「なーに黙ってんスか」

店員の言葉にも、裾を捲り上げることができない。今の今まですっかり忘れていた。忘れるほど♡馴染んでしまっていた。

（今めくったら……ッ！　ば、バレてしまいますッ！　し、下着をつけずに歩いていたこと、知られてしまいます……ッ♡）

そう、式部の今は、ノーブラノーパンセーラー服スタイルなのだ。上着をめくれば、こぼれ落ちる爆乳しか残っていない。

汗びっしょりのはずの肌に、大粒の脂汗が浮かび上がる。途端に異様に空気通りの良いこの格好が気になり出す。スカートから流れ込むエアコンの空気は、溢れた愛液に当たってひんやりと内腿を冷ます。つくんと尖った乳首突起が制服にテントを張っていることに、今更ながらに気が付いた。唯一肌を直接締め付けるソックスのキツさが、妙に安心だった。

「おい」

「ひ……ッ♡」

ずくんと乳首が疼いた。苛立たしげな店員の一言で、式部の身体が喜んだ。マゾヒストを突き進む式部の肉体が、棘のある言葉で響いてしまう。

ヤらなければと身体が叫ぶ。ヤりたくないと式部は争う。こんな場所でこんな人前で。しかも背後では幾人もの男が並び、淀んだ性欲を式部の背中へ注いでいる。

先程までの露出は一眼を憚ってのプレイだった。あれだけでも、二度と思いだしたくなくなるような体験の連続だった。それなのに今、式部の手はその先に行こうとしている。自らの手で自らの変態性を公表しようとしている。

（こんな……は、はしたない姿を、見られたらッ♡　わたし……わたし……ッ？　わたしは）

どうなっちゃうんだろう♡♡♡

心が揺らぐ、身体が動く。着心地の悪いコスプレ制服を捲り上げ、汗粒と一緒に艶めく乳房を弾ませる。巨大な果実は支えをなくし、だっぷんと左右にこぼれ出した。先端の尖り乳首が満足げに頭を逸らして伸びをする。

「ふひッ！　お、おいおいッ！　マジかよ……」

店員の声が上擦った。

背後の男たちが息を呑む。

これだけ大きければ、後ろからだってその真実が理解できたはずだ。

「……ッ♡♡♡　ふッ♡　みられッ♡♡♡　見られてる……わたし、なんで……ッ♡♡♡」

式部が震える。合わせて乳房も震える。熱光線のような雄の目が、揺れる乳首をしかと捉えて悶えさせる。どくどく暴れる心臓が、乳房を破いて発射されてしまいそうだ。

「ひひッ、アンタマジの露出狂だったんスね。こんな乳首カチカチにさせてオモチャ選んでたんだなぁ。フヒッ、こうなるのを初めっから期待してたとかっスか？」

「ちッ、ちが……ッ♡♡♡　ちがッ♡　んふッ♡　はッくぅンッ♡♡♡♡♡♡♡」

式部は乳を暴れさせ、羞恥の絶頂を迎える。限界まで溜め込まれた緊張が、針のように鋭い店員の一言で弾け散った。どろどろと、太ももに熱のラインが広がり、そして落ちていく。乳房から飛んだ汗粒が、レジカウンターにまかれてぱたたッと鳴った。

「マジ？　今貶されてイったの？　変態レベル高すぎっしょ……流石に引くわ、ひっ、ふひッ」

「んッ♡　や、やめて……ッ♡♡♡　はっ♡　はんっ♡　そ、そんなこと言わない、でぇッ♡」

刃のような言葉が式部を貫き、快感を染み込ませる。侮辱すらも絶頂を生み出す糧とする、マゾヒストとして完成しつつある肉体にはあらゆる言葉が快楽のファクターとなっていた。

乳房を隠したいと懇願する。今すぐこの場所から駆け出したいと心の内で叫ぶ。だが、露出に蕩けた肝心の肉体が、下品な視線に晒されることに歓喜していて聞く耳を持たない。

ザワ
ざわ
こちら……は……ッ❤『乳首……ッ❤お、おしおきドーナッツ』っです❤
ジャーン!!
ドキドキ
……ッ❤❤❤
ふっ❤
みられッ❤❤ 見られてる…… わたし なんで……ッ❤❤❤
ボロン
ドキドキ
んふぉッ❤❤❤
おッ ふッ❤
ひぁッ はぁあンッ❤
こ こうヤってぇッ❤ でか、乳首にハメ、てへッ❤ へぉお ーーーッ❤❤❤ ❤❤❤
こ、これ
は、
ん
こ、こひらッ こうヤってへ ち❤乳首ッ❤ わたしのような デカ乳首虐めるために 使いまひゅうッ❤❤❤
しょッ しょのために 1番おっきいサイズの を買いたいンでしゅッ ふぅうぅッ❤❤❤
ヴヴヴ
ヴヴヴ

「ほらさっさとヤってくださいよ、まだいっぱいあるんスから」
「は、はい……ッ♡♡♡ ふッ♡ ふッ♡ ふぅ、んんンッ♡♡♡」
言われるがまま、式部の手は『おしおきドーナツ』を乳首へと押し当てた。現在はライダークラスとは言っても、紫式部は元より知識の者。ドーナツを目にした瞬間から、どう「遊ぶ」のかは看破できていた。目にした時から乳首がギンギンに張り詰めていた。少し狭い内穴へ、式部は自らの乳淫棒を押し入れる。
「んふぉッ♡♡♡ おッ♡ ふッ♡ こ、こうヤってぇッ♡ でか、乳首にハメ、てへッ♡ へぉぉーーーッ♡♡♡♡♡」
乳房の芯まで響き渡るような絶頂振動。式部の乳首を縛りつけたドーナツは、ぶいんぶいんといななきながら高速振動を開始する。内側の凹凸がはち切れそうな乳首を押し潰し、逃げ場のない快楽神経を四方からアクメさせる。
「あッ♡ ひぁッはぁあンッ♡♡♡ こ、これッ♡ しんど……つよ、すぎでぇッ♡♡♡」
式部はへたりとカウンターに膝をつき、乳先で暴れるオモチャにイかされる。背後の男たちに尻と太ももを突き出したサービスポーズで、乳牛のように乳房を揺すり、乳首を愛撫する刺激に嬌声を垂らす。
「はッ　んっはぁ……ッ♡♡♡ こ、こひらッ、こうヤってへ、ち、乳首ッ、わたしのようなデカ乳首虐めるために使いまひゅぅッ♡♡♡ しょッ、しょのために1番おっきいサイズのを買いたいンでしゅッふぅぅッ♡♡♡」
早くも2回の乳首アクメで太ももを濡らす式部だが、健気にもオモチャの説明を試みていた。鼻の下を伸ばした店員の前に瑞々しい乳袋を持ち上げて、カラフルなドーナツに縛り付けられた大きな乳首を見せつける。
「はーッ　んはぁーッ　う、内側の粒々がッ♡ ぢくびこりこりマッサーじひてくれぢゅッ♡ んおッ♡ くれるのがすごくきもぢよぐッで……ッ♡♡♡ くせになッでまずぅッ♡♡♡」
「ひ、ふひひッ！　そりゃそうっスよね！　こんなクソデカ乳首してる女が乳首アクメ常習犯じゃないワケねえっスわ！」
店員は笑ってバーコードリーダーを差し出した。乳首で震えるドーナツのタグに赤いライトを当てる。
しかし、
「ちょっとお客さん？　乳イキするのはいいんスけど、動かれると読み取れないんで静かにしてもらえます？」

「はッ♡ ひいんッ♡ しょッ、しょんなッ♡ んぁおッ♡♡♡ お、おやめくだひゃッ♡ 今ッ、乳首びんかんひゅぎへッ♡♡♡ へおぁッ♡♡♡」

リーダーを押し付けた先は、ドーナツの穴から顔を出した式部の真っ赤な乳首。振動でぶるぶる頭を震わせる神経の塊に、リーダーの角がこりこりと擦り付けられる。アクメが詰まった先端を弾かれて、式部はみっともなく身体をのけぞらせた。乳先に溜まった熱が、乳腺を拡張しながら飛び出していく。白いミルクがリーダーに降りかかる。

「んおッ♡♡♡、おッふひッ♡ ひほぉおお、おぉぅッ♡♡♡♡♡♡」

「ちょっと！　母乳かけないでくださいよぉ、コレ備品なんスからね・・・・・お、ちゃんと読み取れてんじゃん」

リーダーについたミルク滴を拭き取った店員は、レジの画面を見て呑気に言った。

一方の式部はカウンターにぽたぽたとイキ汁を溢しながら蹲る。ゾクゾクと背筋を伝って広がる快感熱が、乳首アクメで更に増長していく。

（ど、どうなってしまったの・・・・・ですかッ♡ わ、わたしのカラダっ、なんでこんなに喜んで・・・・・っ♡）

「あーもう、また固まって・・・・・ほら乳首はもういいっすから！」

店員がドーナツをむんずと掴む。我に返って手を伸ばした時にはもう遅い。

ぬぼ・・・・・ッ

「おッふぅうンッ♡♡♡」

式部の乳首を擦り上げ、ドーナツが勢いよく引き抜かれた。ドーナツとの別れを惜しむように白いアーチを描き、膨れ上がったデカ乳首が姿を表す。

式部は口を淫に窄め、湯気すら立ちそうな熱った吐息を吹き出した。乱暴にされた快感が、式部の身体を駆け巡る。その感覚に慣れ、あまつさえ「心地よい」と覚えてしまったことを理解させられる。

ミルクまみれのドーナツをそのままカゴに放り投げ、店員が「次は」と目を向けた。

「・・・・・ッ♡」

咎める視線に乳首を痺れさせ、式部はオモチャの山に手を伸ばした。

◆

べちゃ、とカゴの中に『ザーメン吸い出し吸引機／イボ付き【男性器用】』が投げ入れられる。付属の透明ボトルには、なみなみと白濁液が溜められており、逆流したミルクがパッドの内面がら溢れ出していた。

「ふーッ♡♡♡ ンふーッ♡♡♡ ふぉ……ッおほぉーッ♡♡♡ こッ、このようにぃ♡ わ、わたひのッメスウシ乳にはぁッ、ふ、普通の搾乳パッドが入らな、イので……ッ♡ お、おチンポサイズのものをッ、つ、使っておりまひゅッ♡♡♡」

「すごかったっスよあんた！　ふひょっ、マジのチンポ乳首じゃんっ！　乳首からあんなにどばどば吸われてイきまくるのなんてＡＶでも見たことなかったっスわ……」

店員の興奮した顔から目を背け、式部は小さく「そうですか……っ♡」と呟いた。

ずきずきと怒張する乳首の感覚は、とっくに麻痺しきっていた。愛撫振動とミルクの噴射、内外からのアクメ誘発が式部の乳首を完璧なマゾ性器へと造り替えていた。ポタポタと染み落ちるミルクの分泌はもはや止まることはなく、興奮で乳腺が広がりきった証だった。乳頭の先端には一つ、また一つと白い水滴が浮かび上がり、丸い乳房を伝って下腹部へと滑り落ちていく。これだけ勃起してしまった今、セーラー服を着直したところで胸のポッチは誤魔化しきれないだろう。どれだけ厚着をしようとも、溢れ続ける乳滴が衣類を濡らし、胸の先に淫な染みを作ってしまうことだろう。

ドーナツバイブに始まり、乳房振動パッド、乳首ブラシバイブ、乳首オナホ（最大サイズ）、そして吸引機がミルクを垂らしながらレジを通っていった。その一つ一つで式部は淫な喘ぎを披露し、自らの手で乳首をアクメさせ、その様相をカメラに収められていた。

カウンターは雨漏りしているのかと勘違いする程にミルクの池が広がり、式部の乳首から追加ミルクが供給され続けている。

「んッ♡ふーッ　ふーッ♡ふーッ♡」

目を細め、荒く呼吸を繰り返し、式部は乳に広がる快楽電流を落ち着けようと足掻く。繰り返される振動が細胞にまで浸透し、何もされていなくともバイブをぐりぐり押し付けられているかのように乳首が痺れ喜んでしまう。足は生娘のように弱々しく震え、ちょいとつついてやるだけであっけなく折れてしまいそうだ。

浅ましく喘ぐその顔を見て、これが源氏物語を書き上げた文章家だと信じる者は皆無だろう。熟練の娼婦と言われたならば、誰もが深く頷いたかもしれないが。

（こ、これ以上は……ッ♡ほ、本当に壊れて、しまいますッ♡イき乳首になって……戻れなく、なってしまいます♡♡♡わたしがどうかなってしまいますっ♡）

戻れなくなったら、と浮かび上がる思想を、式部は首を振って押し戻した。それ以上考えようものなら「我慢できなく」なってしまいそうだった。身も心も完全に、快楽に堕落してしまいそうだった。

「つ、次はこちら……ッ♡」

湧き上がる破滅妄想から逃れるように、式部は手に触れたコードを引き出した。ピンクのコードで繋がれたコントローラーと卵型の装置。

「ぴ、ぴッ♡ピンクローターです……ッ♡」

店員がおっ、と声を弾ませた。

最もメジャーな性具……ジョークグッズといえば電マかローターというのが多くの意見。震える指で式部が目盛を回せば、ぶいぶいと元気に振動をし始める。

「ここにきてオーソドックスなヤツも欲しがるなんて……エロに貪欲っスねえ」

煽るような店員の一言に、式部は顔を逸らして赤面するばかり。これだけ乳首アクメを披露して、「違う」など言うだけ無駄なのだ。

振動するローターを手に、スカートを握る式部。一瞬の戸惑いに手が止まるが、そのままゆっくりとめくっていく。

「ふひょ・・・・っ、そうっスよね。上もそうならそっちだけ履いてる訳・・・・・ひひっ」
助け舟を出すようでいて、その実「アンタが変態だってことはよく知っている」とでも言いたげな店員。太ももを伝う愛液粒を食い入るようにして見下ろしていた。
「・・・・・ッ♡♡♡」
式部がミニスカートをたくしあげれば、もはやそこに隠せるものは何もない。赤く濡れそぼった恥丘が顔を出し、綺麗に毛を剃り上げられた先端部からはピンクのクリトリスがしっかりと頭をもたげている。ワレメから溢れ続ける愛液で内腿はじっとりと濡れ、恥ずかしそうにすり合わせるとくちゅりと音を鳴らした
「なぁに今更清楚ぶってんスか？　変態女だったら堂々と股開いてくださいよ」
「は・・・・・はぃッ♡」
店員に柔らかな腿を叩かれる。それに抵抗や言い訳をできるような力は、式部には残されていない。詰られるままに従う方が気持ち良いと、身体が覚えてしまっているから。
言われるがまま震える足を左右にずらし、ゆっくり股を広げていく。ねばつく汁がアーチを描き、甘い香りを立ち昇らせる。とくとく鼓動するお腹の底から、また溢れんばかりの愛液が染み出してくる。
「ちゃんと毛まで剃って、真面目な変態なんスね」
「はい・・・・・しっかり、見ていただく為に・・・・・そ、剃り上げて、おりますッ♡♡♡」
ボディペイントの為に一本残らず剃られたなどとは口が裂けても言えない。いや「ちゃんと見て欲しいから剃っている」と言わされるのと比べれば同じようなものかもしれないが。
式部はそんな、産毛もなくなった柔肌に、容赦無く震えるローターを近付けていく。触れれば絶頂は免れない。耐えようとする意思も虚しく、のけぞりアクメしてしまうのは式部にもよくわかっていた。そしてそれをわかっていながら、手を止められないということも。
だが、式部の手は別の手によって行手を阻まれた。見上げると、店員が手のひらでローターを塞いでいる。

「あー、せっかくなんでお客さん、そっちの方々にも見せてあげたらどうっスか？　今更隠すつもりとかないでしょ？」

式部は、店員が指差す方を見た。すっかり意識の外に置かれていた、アダルトコーナーの店内が久しぶりに目に入る。そして、いつの間にやら接近していた男たちのニヤけ顔までも。

「ひ……ッ♡♡♡」

喉がはね、思わず一歩背後に引く。だがすぐに分厚い尻がレジカウンターへと阻まれ、男たちから距離をとることができない。

勃起乳首を腕で隠し、濡れたワレメに手を被せ、真っ赤な顔をふるふると左右に降りしきる。だが腕の隙間から溢れるミルクも、床に溜まった汁溜まりも、それらを式部が吹き出して喘いでいたことを男たちは知っていた。

トラブルが起こってからこっち、式部は目の前のエログッズを消費することに躍起になっていた。後ろではチラチラ映る太ももや乳房に吸い寄せられて、コーナー中の男たちが集まっているなど、気付く余裕もないほどに、身体を弄る淫具に溺れていた。

改めて、男たちの視線が式部の身体にへばりつく。たっぷり虐められた乳房を舐めまわし、熱った美貌を食い入るように見つめている。濡れそぼった陰唇を目にした男たちは、分厚い舌で己の唇をべろりと舐めた。

「もうみなさん知ってるんスよ。あんたが露出狂のオナニー中毒者だってね。だからほら……こうやってお客さんに協力してくれているんですわ」

「き、協力……ッ♡」

店員の言葉を復唱する式部。はて、協力とはどんな意味だったか。望まない現実に拍車をかける事を、協力と言って良いのだろうか。それとも式部はこの状況を、望んで手にしたのだっただろうか。

わからない。考えられない。

急速に高まる体温が脳を煮えた立たせ、思考を抑え込む。どく、どく、どく、と肌が内側から張り詰め、そして弾ける。ただでさえ硬くしこり勃っていた乳首が、更にもう一段階、きゅうと引き締められる。白いミルクが乳首から溢れ、柔な

乳肌に白く線を引く。腹部が焼けるように熱くなり、どぷぷ　と太ももに溢れ出す。ぞわりと背筋に電流が走り、式部は思わず両手を握りしめた。

「ふッ♡ふぉ……ッ♡♡♡〝おぉ……ッ♡♡♡♡♡♡」

「ひっ、ひひょ……ッ、見ましたみなさん⁉　この女イきましたよッ！　皆さんのおかげで露出狂がみっともない声でイっちまいましたッ！」

股を濡らして嗚咽を漏らす式部の肩を叩き、店員が興奮気味に叫んだ。

男たちはスマホを持った手でベチベチと拍手する。手のひらを叩く音が、式部の素肌に響き広がる。

自分が今、オスの目に晒されて肌を見せている事実が改めて現実のものとなる。

「ふぅッ♡ふぅッ♡そ、それでは……ッ♡この……ローターを……ッ♡♡♡」

急かされるよりも早く、式部はローターを差し出していた。理性を妄想が押し潰し、黒い想像に導かれるように手足が動き出す。

商品棚の林では、男優二人の目の前で潮を吹いてアクメした。つい数分前まで、レジ打ち店員の前でミルクを吹き散らしていた。どちらも霊基の芯に差し込むような、熱烈な絶頂体験だった。それでは、

（それでは……ッ♡こ、こんな大勢の男性の前でイってしまったら……わたしは……ッ♡♡♡）

想像を言葉に、書面に世界を創り出したサーヴァント、紫式部。その淫乱な妄想力もまた、留まるところを知らなかった。

「んぐぃぃッ♡♡♡ひぎッ♡はッ♡あ♡♡♡しんどう……づよッぃぃぃぃッ♡♡♡あふッ♡これ、イっちゃ……ッ♡だめぇッ♡♡♡」

躊躇のない振動「大」のローターが、式部のクリトリスを押し潰す。式部は乳房を揺さぶって、肉体を駆ける電流を受け止めた。チクニーですっかりできあがっていたクリトリスはとっくの昔にフル勃起。強烈な振動をダイレクトに受け止めて、式部の身体をひっくり返す。

「〝おッ♡♡♡ふぉッ♡〝おッ♡おーッ♡♡♡ひゅごッ♡く、くりッ♡♡♡どげりゅッ♡♡♡これひゅごぉおッ♡♡♡」

びちちと振動で汁が飛ぶ。それを顔面に受け止めるほどに雄の顔が迫ってくる。滅多なことでは人前に出してはいけないと教えられてきた式部の恥部が、名前も知らない男たちに凝視されている。

「んッ♡♡♡ ふッ♡ は、あァッ♡♡♡み、みられてる……ッ♡♡♡ わた、しッ♡ クリおなッ♡ みられてッ♡ かんじでッ♡♡♡ふぁッ♡〝あーッ♡♡♡ こんなッ♡ だめなの、〝にいいぃいぃッ♡♡♡」

込み上げてくる。どろどろと煮えたぎった快感が突起に集約していく。乳房に、クリトリスに、噴火直前の火山のように、絶頂のマグマが競り上がる。

式部の手は躊躇わなかった。ここ一番の力を込めて、ぷりっと太ったクリトリスをローターで弾き責める。絶頂を溜め込んだ式部の女体が、クリトリスを皮切りに弾けトぶ。

「ふぉッ♡♡♡ おッ♡〝イッ♡ンッ♡♡♡くぁおおおおぉおぉ〝お〝おッ♡♡♡♡♡」

乳房が空を飛ぶ。乳頭から飛び出す白い噴水が、丸く軌跡を描く。ローターを跳ね返すほどに、式部のアクメ潮が床へと飛び出した。

舌をピンと張り詰めて、困り眉で瞳を引き絞り、紫式部は全身でアクメする。身体が宙へと投げ出されたように重力を失っていく。乳腺が痺れ、クリトリスが破裂したとすら錯覚する。視界が真っ白な光に包まれて、ぱちぱちと赤い火花が飛び散った。どろどろ流れ出ていく熱い汁の一滴に至るまで、バカになった神経が絶頂へとつなげてしまう。

「うぁッ♡〝あッ♡♡♡〝あーッ♡♡♡ ごりぇッ♡ どまんな いッ♡〝イぐッ♡ やあッ♡ はッ♡ は、んぁあーッ♡♡♡♡♡」

式部の足は重たい身体を支えきれず、イキ汁まみれの床にへたりこむ。あらゆる筋肉が式部の意思から離れていく。弛緩した尿道が口を開き、じょろじょろと溜まった黄金水を放出する。式部は慌てて両手を差し出すが、熱が放出されるゾクゾク感に快楽負けし、涙をこぼして鳴くだけだ。

揺れる乳房と跳ねる乳首。流れ続ける愛液溜まりから立ち登る湯気。そして、くしゃくしゃになってなお、身体に反響する絶頂を訴える式部の表情。

つ…
次はこちら……ッ❤
んぐぃいッ❤❤❤
ぴッ❤ピンクローターです……ッ❤
ここにきてオーソドックスなヤツも欲しがるなんてエロに貪欲っスねぇ
しんどう……づよッぃぃぃぃッ❤
ひぎッ❤
おっ
これイっちゃ……だめぇッ❤❤❤
んっ
み、みられてる……ッ❤❤❤わた、しッ❤ クリおなッ❤みられてッかんじでッ❤❤❤あ゛ーッ❤❤❤こんなッ❤だめなのにぃぃぃぃッ❤❤
おッ❤❤❤ふぉッ❤おッ❤おーッ❤❤❤ひゅごッ❤く、くりッ❤❤❤どげりゅッ❤これひゅごぉおッ❤❤❤
うぁッ❤あッ❤❤❤あ゛ーッ❤❤❤ごりぇッ❤どまんない゛ッ❤イぐッ❤やッ❤はッ❤はぁんぁあーッ❤❤❤❤❤❤❤

血走った目を瞬かせることすら忘れ、男たちは互いを押し退けあって式部の有様を写真に収める。パシャリという軽い音が鳴るたびに、紫式部の性をくすぐる乱れた身体が記録され、式部の手の届かない場所に持ち出されていく。

店員が満足げに笑い、拾い上げたローターをカゴに入れた。

「ほら、ちゃんとお礼言ってくださいよ。あんたのオナニーにみなさん協力してくださったんスから」

ペチペチと汗だくの頬を叩き、店員が笑った。

男たちも笑った。

式部は重い身体を起こし、震える膝を折り畳み、両の手を膝の前に付く。見上げれば、息を荒くした雄たちが式部を見下ろしている。汗だくのメスとなった身体を、視線で犯し、嬲ってくる。ゾクゾク身体を巡るのは、雄に屈するマゾヒストの快感か。地に這いつくばり、下品な視線を向けられる悦びに絶頂したがる、式部の暗なる欲望の現れだろうか。

式部の身体が、そんな邪に争うことはなかった。

「・・・・・ッ♡♡こ、このたびはッ♡わ、わたくひのぉッ♡ろ、ろッ・・・・・露出、おなにぃにご協力いただき・・・・・♡♡あ、りがとう、ございました・・・・・ッふぉッ♡お、ンぉッほ、ぉッ♡♡♡♡♡♡」

くちゃりと愛液溜まりに額を落とし、紫式部はアクメする。背中に浴びせられる視線の刃が子宮を膨らませ、膣口をトロトロに溶かしていく。床と膝におし潰された乳房が苦しみに喘ぎ、硬い床に乳首を擦り付けてしまう。アクメの拍子にぶりんッ、と跳ねた尻肉が実に滑稽だ。

「みッ、みなひやまのおかげで・・・・・ッ　あ、アクメさせていただけまひゅッ♡ふぉッ♡♡♡おッ♡くーーーッ♡♡♡♡♡」

小さく蹲った式部の身体は、二度三度と震え、絶頂を繰り返す。突き出したワレメから、何度も何度も潮吹きが起こり、男たちを笑わせた。

「もっと遊べそうっスね。ふ、ふひッ、コレなんか着せて、アンアン言ってくんないかなぁ」

エログッズの山からテカテカ輝く布切れを引っ張り出し、店員は笑った。
盛った犬のように呼吸をするだけの式部には、彼が放ったその言葉を理解することはできなかった。

4章：アへりすぎて美女崩壊、腰へコディルドオナニーショー！

「ホラぁ、早くしてくださいよカオちゃんさん！　うちらもヒマじゃないんで、あんたの自己紹介にばっか時間さいていられないんスよ！　ダラダラやるんだったらケーサツんとこ行ってもらいますからね？」

「はひッ！　た、ただいま着替えおわりましたので……ッ♡」

更衣室を包み込む暗幕をばふばふと叩き、店員は式部に催促する。苛立たしげな口調とは裏腹に、彼の浮かべる表情は下心の詰め込まれたニヤつき顔だ。ノックの音に驚き飛び上がる式部の返事を聞き届け、その口角を更に釣り上げる。

周囲を見回したニヤリと下品な笑顔を浮かべる。店員は指を口元に当てて「静かに」と合図を送った。式部が囚われた更衣室を取り囲み、その奥を透視せんとばかりに凝視する観客たちが、店員へ無言で頷き返す。

レジカウンター前で突如として行われたダイナマイトボディのオナニーショーは、アダルトコーナーを這いずり回っていた客たちをあっという間に引き寄せた。汗と愛液とミルクと、あらゆる体液を撒き散らしてのけぞりアクメする紫式部を目に焼き付けた男たちは、湧き上がった欲望を暴走させていく。

名も顔も知らぬ同士でありながら、彼らは統率された動きで紫式部を取り囲む。もはや彼らは店員を頭脳とした一匹の生き物だった。紫式部という極上すぎる餌を心ゆくまでしゃぶりねぶり、食らい尽くすまでは止まらない。今もこうして、瞬きすら忘れて黒い垂れ幕を凝視するその仕草には一切のブレさえ残っていなかった。

運命共同体となった客たちに沈黙を促して、店員は暗幕へ静かに手をかけた。妙に陽気な店内ＢＧＭが鳴り響く中、暗幕は音もなくカーテンレールを滑っていく。一斉に男たちはゴクリと唾を飲み込んだ。

薄暗い店内にぽっと白い光が灯る。

「……ッこ♡　これ……こんな、太い、の……ッ♡♡♡　は、挿入（はい）る、なんて……ッ♡♡♡」

消え入りそうなか細い声が、幕開けと共に聞こえてくる。それと同時に目に飛び込んでくるのは一糸纏わぬ巨大ヒップだ。更衣室の奥壁に向かって屈み込んだ姿勢の紫式部。何時間にも渡る座位での執筆によって鍛え上げられたもっちりたっぷりの尻肉が、まるで男たちに献上される宝物のように差し出されている。

式部の緊張を体現するかのように時折ぶるりと揺れ、その度に男たちは喉を硬直させた。

「ふっ♡ ふっふっふっ♡♡……む、無理ッお、おっき、すぎて……ッ♡♡♡」

ぶるるッ、とデカ尻が揺さぶった。尻の谷間の奥底で、ぷっくり膨らんだ肛門がピンクの肉を覗かせている。毛を綺麗に剃り上げられた陰唇から、とろりとマゾ汁が溢れ出し、尻同様にむっちりと肉付きの良い太ももに垂れていく。

式部の顔はその肉に遮られて除けない。だが、嗜虐心をくすぐる美女の涙目は容易に想像できていた。

一筋の愛液が床に向かって降りていく。太ももの僅かな隙間を縫って、つつつ……と何者にも遮られずに伸びていく汁。真下に構えるショッキングピンクなイチモツの先端へ、ゆっくりと滴れ落ちた。震える式部が握り締めるパステルカラーのハイレグ水着。式部のアナルとヴァギナを蹂躙する場所に極太のディルドを付属させたエログッズ。そう、式部の次なるグッズオナニー公開ショーは、この『両アナぐちゃぐちゃマイクロビキニ（ディルド極大×2付き）』なのだ。

「せめて着替えの最中だけは」と泣きついた式部は、どうにか更衣室での着替えを承認された。レジカウンターに立てただけで式部の鼻先にまでそびえ勃つデカマラ仕様のディルドを二本、それも同時に差し込まれる姿など誰にも見られたくはなかった。

裸を見られ、ボディペイントを見られ、無様なオナニー失禁まで視姦され尽くした式部にもまだ僅かながら羞恥の感情を残していた。無意識に残していたと言った方が正解か。開花した精神的マゾヒズムが「羞恥の末に剥き出しにされる無様こそ史上」と理解しているのだ。故に、式部はこうして敢えて男たちの視線を避けての着替えに臨んでいた。

（こ……こんな張型（ディルド）などでアヘ狂っている姿……ッ♡♡ み、見られるわけには、いきませんッ♡）

（でも万が一……こんな立派なオモチャに鳴かされる瞬間を見られてしまったら……ッ♡♡♡）

「それはどれ程気持ち良い絶頂なのだろうか」という思考を式部は放棄する。その思考を認めてしまうことはすなわち、

式部という人間の終わりを感じさせたから。そんな変態的期待に股を濡らしていることを感づかれてしまう無様を想像するだけで、果ててしまいそうだったから。

「ふ・・・・・ッ♡♡♡ い、イきます・・・・・ッ♡ 香子、デカマラパンツ、そ、挿入しまひゅッ♡♡♡」

式部は尻を揺すって覚悟を露にする。叫んだ文言は、事前に店員から命じられた挿入の合図だ。背後で男たちが尻を眺め、声を殺して笑っているとも知らず、式部はきゅうとアナルを引き締めた。

決心が揺らがぬうち、自らの愛液でデコレーションされたパンツをゆっくりと股間に引き上げていく。大きすぎるディルドを上手く挿入させるため、渋々開いたガニ股ポーズが実に惨めで男たちの笑顔を誘う。ちゅくりと切先が穴に触れる。式部は「ひィんッ」と腰を浮つかせ、敏感な内壁に響く極悪なまでのサイズ間に期待する。短くなる呼吸をどうにか押さえつけ、煮えたぎった自らの蜜壺にディルドを一気に引き入れる。

じゅッぶぶンッ

「おひッ ひおッほおおぉぉぉ・・・・・ッ♡♡♡♡♡♡」

両腕が一気に引き上げられる。ピンクのディルドが真っ赤な肉穴に飲み込まれる。そして、式部は乳房を振り乱して上半身を跳ね上げる。

巨大で柔らかな乳肉果実がばるんと弾む。小さく頼りない紐のようなビキニが、暴れる乳肉を必死になって抑え込む。アナルにねじ込まれるディルドにアクメして、式部の尻肉が収縮する。ビキニパンツはみるみるうちに躍動する桃尻に吸い込まれ、まるでTバックのようにみっちりと谷間の奥へと沈んでしまう。

飲み込まれたパンツにみるみる染み渡るアクメ汁。ものの数秒で保水力を超過して太ももを濡らしていく。

「おッ♡ おほッほ♡う・・・・・ッく、ほっ♡♡♡ か、かおるこぉッ♡ お、ッきがえおわりまひ、たはぁッ♡♡♡」

アクメをしつつも律儀に着衣報告を済ませる式部。張型がアナルを強引に拡張し、臓器を押しのけんばかりに子宮が犯される。そしてそれを自らの手で実行に移したのだ。ゾクゾクと背徳感が絶頂を唆し、揺れる乳房の先端で、乳首が痛いほどに勃起する。平常を保つことなどできるはずもなく、だらしなく蕩けた顔で、聞くに耐えない嬌声を吐き続ける。

はぁはぁ
……ッ❤❤❤
おひッ❤
ひおッほおおぉぉぉぉ……ッ❤❤❤❤❤❤
あへ
ぱっ
ぱっ
ぶしゅっ
ぶしゅっ
ぶしゅっ
いイふきます…ッ❤
香子、デカマラパンツそ、挿入しまひゅッ❤❤❤
おっ
ほっ❤❤❤
かおるこぉッ❤
お、おきがえおわりまひぃた
はぁッ❤❤❤
おっ!!
ぶるっ
ぶるっ
ぶるっ
ぶるん
あぁ
は……はァッ❤
はッ❤
え、う、うそ……
いつ、えッ❤
そん、な……ッ❤❤❤
うそッ❤
ブルブル
ふぅーッ❤
ふぅーッ❤
み、みられ……ッ❤❤❤
みなひゃんにッ❤
わた、わたひのアクメ……
み、見られて……？

ガニ股ポーズでカクカク揺れる両足が、膣と腸に痺れる快感を送ってやまない。視界の底で瞬き続けるアクメフラッシュが脳を揺らし、まともな思考を許さない。例え視界が元の色を取り戻そうと、腹に沈んだ重い疼きが式部を快楽の渦に留めるのだ。

「はーッ♡ はーッ♡ くふぁーッ♡♡♡ いぐッ♡ い、いぐ、ですッ♡♡♡ アクメ、ぉおわンなぃッ♡♡♡♡♡♡くるじッ、いのに……ッ♡ イっちゃ、イってしまいま……す……？」

アクメに揺さぶられた視界が、次第に本来の機能を取り戻す。紫式部の目の前に、鏡に映った自身の顔が映し出されている。清楚なる文筆家などといった存在とは無縁の、惨めで淫で、性欲に染まったメスの顔。だが、式部の瞳が見据えていたのは自分ではない。

その背後、入った時にはしっかりと締めて置いたはずの暗幕カーテンが消えている。黒い布壁は取り攫われ、外の黄色がかった蛍光灯が見えている。たった今曝した痴態を覆い隠す大切な壁が、すっきり取り除かれている。

「は……はァッ♡ はッ♡ え、う、うそ……いつ、えッ♡ そん、な……ッ♡♡♡ うそッ♡」

ゾクゾクゾク、と式部の背筋を快感が駆け上る。頭の後ろ側がパチパチ弾け、冷たい刺激に恐ろしい（すてきな）予感がよぎっていく。背中を焼き焦がすようなこの感覚。肌の快楽神経を破裂させんばかりのこの熱線。オスの下卑た感情を乗せた視線を浴びせられたかのようだ。

「ふぅーッ♡ ふぅーッ♡ み、みられ……ッ♡♡♡ みなひゃんにッ♡ わた、わたひのアクメ……み、見られて……？」

紫式部はゆっくりと、まるでホラー映画のワンシーンのように震えながら、背後を振り向いた。黒い瞳はこれでもかと大きく見開かれ、式部の心と同様、決壊寸前まで涙が溜まっている。はくはくとコイのように開閉を続ける口元には混乱と快感、そしてちょっぴりの期待が伺える。弾けんばかりの心音が溢れ出し、乳を覆う布地がじっとりとシミを浮かばせた。

「はッ♡ はーッ♡ は……ッ♡♡♡ み、みなじゃひおほッ♡♡♡♡♡♡」

脂汗の浮かんだいくつものオスの顔。その全てが式部の尻肉を凝視している光景を目にしたその瞬間。式部のナカに詰め

込まれた猛々しい狂気が高速の振動を開始する。

スイッチを入れたのは勿論店員だ。歯を見せて笑い、リモコンの目盛りを最大振動まで一気に引き上げる。

受け止めるだけでも精一杯であった極太オモチャたち。それが膣壁を揉み倒し腸壁を擦り上げ、ぶいんぶいんと暴れ出す。

「んぁあああおぉおぉおおおおッ♡♡♡ イくッ♡ これひゅごッ♡ カオりゅごッ♡ イぎまひゅうううぅぅぅッ♡♡♡♡♡♡ おほッ♡ ほぎぃひぃぃぃッ♡♡♡♡♡♡」

式部はたまらずその場にへたり込む。そうすることで余計にパンツが食い込み、ディルドが深みへと導かれるのだが、絶頂に忙しい式部の腰が持ち上がることはもはやあり得ない。背骨を直に揺さぶってくるアナルアクメ、心臓と脳を同時に貫くようなポルチオアクメ。

追加とばかりに注がれる、オスたちの油ぎった視線。

汗の伝う背筋から、汗が留まる程の尻肉へ視線は動き、リズミカルにアクメするアナルを鑑賞する。アナルを蠢くディルドに操られ、式部の尻肉は別の生き物かのように弾み暴れてアクメする。

「はッ♡ はぁッひぃぃッ♡♡♡ み、みらいでっ♡ おぅッふぅうッ♡♡♡みなぎンッ、どうかみないでへぇえッ♡♡♡ おぉねッ♡ おねがいぃぃぃッ♡♡♡♡♡♡ んぃぃぃぃッ♡ むりっ♡ こんらのむりぃぃぃぃぃぃッ♡♡♡♡♡」

腹の底で暴れる絶頂に乱れる式部。残された羞恥心を振り絞って手をかざし、己の無様を隠さんとする。だが当然、式部の細く筆のような指ではむちむちとはちきれんばかりのエロボディを包み込めるはずもなし。必死に空を掴もうと振り回される腕の滑稽さが男たちを笑顔にさせるだけだった。

ビクビクビクッ！　と身体中の淫肉を揺さぶって、紫式部はアクメする。尻からアクメが駆け上がり、乳房を跳ね上げ天を仰がせ、淫な女体を退け反らせた。

「はぉッ♡ンはぁあッ♡♡♡ おねがぃッ♡ ぶるぶるどめでぇッ♡ ひッ♡ンひッ♡♡♡ ひんじゃうッ♡ イぎすぎてひんじゃうッ♡♡♡♡♡♡ はッはあんッ♡♡♡ みぁぃでッ♡ どめでええええぇぇぇッ♡♡♡♡♡♡」

みかえり美人の如き姿勢を打ち震わせ、汗だくの肢体でオスたちを喜ばす。店員が持つリモコンは未だ振動最大値。じょ

ぼじょぼと浮つく股間から小便を漏らし、式部は淫猥なダンスを止められない。
式部が声も上げられなくなるまでは止まることはないだろう。
響くその声が、式部の羞恥体験開始を合図するベルとなるのだ。

◆

紫式部は唇を尖らせて嗚咽も漏らし、床に糸を引いて立ち上がる。ディルドのバイブレーションをどうにか止めてもらった今も、腹部に感じる揺れるような快感が治らない。膣にもアナルにも、凶悪なまでのイチモツがしっかりと咥えさせられ、パンツを引き下ろさない限りは外れない。立ち上がるその動作だけでも、ディルドに植え付けられた凹凸が膣壁をぷりゅぷりゅと擦り上げ、そり返った先端が腸内を引っ掻き回す。ずくずく響く重い電流が、式部の僅かな動作で腹に満ちる。
その都度男たちが下卑た声をあげ、式部は頬を染め上げて外方を向く。
セーラー服を着直しても、じゅくじゅくと愛液が染みた太ももは健在だ。ディルドに蹂躙されてなおも溢れ続ける愛液がスカートの裾からつつ、と現れては男たちを楽しませる。汗ばんだ襟元を除けば、ケバケバしいまでのラメ入りビキニ紐がチラリと覗き、清楚な制服に隠れる変態情欲を誇張する。濡れた前髪を額に貼り付け、潤んだ唇を震わせて上擦った熱い呼吸を繰り返すその顔は、乱れに乱れた性の体現者とでも言うべき仕上がりだ。
「はい、コレ上げます、ふひッ。コレでどんな風に遊ぶのか、うちらに見せて欲しいっスね、ひッひひッ」
「ふーッ♡ンふーッ♡ひゃ、え……こ、コレで……？」
店員から投げ渡されたのは、レジを通されたはずの文庫本。脳をつんざくアクメの連鎖で視界がぼやけ、式部はごしごしと何度も目を擦り、タイトルを読み上げる。
「え、ええとコレは……ッ！　じ、地味系ドスケベ図書委員長の……っ♡　い、い、淫乱……露出アソビっ♡」
読み上げたその瞬間、ドクンと心臓が高鳴った。黒いセーラー服を肌けさせ、白い乳房と太ももを露にした少女のイラス

トが表紙を飾る、アダルト小説だ。真っ直ぐに伸びる黒い髪や少し野暮ったい黒縁メガネを見れば、少女がいかに真面目で大人しい娘なのかが伺える。その反面、乱れた制服の奥に見える刺激的なオモチャの数々が、少女の秘めた情欲の強さを強調する。少女が真面目な表の顔で隠した本当の変態的自分を開放しているのはどこかの図書館。ヒトが歩き回る明るい場所から影へと逃れ、身体に散りばめられたオモチャに弄ばれている。

セーラー服に身を包んでおきながら、大量のオモチャを買い漁り、喜び勇んでそれを身にまとう紫式部とよくよく重なる姿があった。明るい面の世界を気にしながらも、太ももに熱い汗を垂らす少女の顔は、きっとディルドをハメ込んだ紫式部と同じモノだろう。

表紙を凝視し、カバーがよれそうになるほど握りしめる式部。その赤い耳へと店員が囁いた。

「……ッ♡♡♡ あ、あの……ッ♡ こ、これ、はぁ……ッ♡」

「え？　カオちゃんさんが真っ先にあのエログッズの山から手に取ったヤツっスよ？　コイツを買って読んで……ふひッ、どうしたかったのかなァって思ったんスよねェ」

式部は側から見てもわかるほど、ぶるぶると身体を震わせる。物語の登場人物に自信を映し出し、まるでその人物になったかのように物語を楽しむ遊び。それは式部にはよく馴染んだ遊びだった。古今東西の英雄英傑が集合しているカルデアにおいては特にそうだ。式部の生前には想像もつかない人物・出来事・現象を体感してきた者たちの言霊を脳裏で再現し、その中に浸って妄想に耽るのだ。

そうしたアソビは当然の如く、疼く身体を慰めるためにだって使われていた。

「いやいや、分かんないっスよ？　分かんないっスけど……カオちゃんさんはこんなエロ小説で遊ぶの、好きそうっスから？」

式部の心を見透かすかのように、店員は囁いた。

暴れる式部の心臓が、図星を突かれて更に大きく跳ね上がる。慌てて目を逸らすももう遅い。ふつふつと浮かび上がる汗にあたふたと動き回る瞳、「当たりです」と自ら暴露しているも同然だ。

「それは、そ、その……ッふぃいぃッ♡♡♡」

カリッと、店員の爪が式部の勃起乳首をかすめていく。薄手のコスプレセーラー服を自慢げに持ち上げるその乳突起はあまりにも狙いやすく、店員は何度も何度も、左右の突起を弾いて遊ぶ。

「何、今更恥ずかしがってんスか？　カオちゃんさんが、ヒトに見られて、こーやってエロ乳首おっ勃てて、おまたぐっちょぐっちょするのが大好きな、ド変態ってコト……ここにいる全員よーく知ってんでスよ？　それともなんスか？　こんな乳首カチカチにさせておいて違うって言えるんスか？」

「んぁッ♡ はッ♡ やッ♡ ンひぁッ♡ ま、まッへ♡ それッ♡ ピンピンやめへっ♡ ち、ちがうんですぅっ♡　ど、ど変たッひぉッ♡ おッ♡ ふぉおッ♡♡♡」

ぱしんぱしんと爪が布地を擦りあげる。その度式部は顔をそり返し、弱々しく店員を押し退けようと手を伸ばす。だが、カツカツ虐められる乳首の刺激は式部の脳をあっさりと蕩けさせ、オスへの被虐欲をふつふつと沸き立たせる。ようやく立ち上がった両足が再び小鹿のように震え出し、その太ももに新たなイキ汁が流れ落ちてくる。

「ホラこれ、あんたさっきまでこんなエロ顔して人前でアへってたんスよ？　ふひひッ、改めて見てもすっげえ。こんな顔したド変態女のクセして、まーだいっちょまえに人間ぶっていられるなんて、すごいっスよねぇ」

店員がスマフォの画像を見せつける。

式部は驚き硬直し、目を見開いて液晶を見据えた。乳首に搾乳機を当て、搾乳パッドからミルクを溢れさせながらイき顔を晒す紫式部の上半身ショットだ。背景に映る、呆然とした顔で式部を見つめる男たちの間抜け顔とマッチして、ベストな露出狂具合を醸し出している。

「い、つの……まぢひぃおッ♡♡♡♡♡」

そして乳首をつまみ上げられ、唾を飛ばしてのけぞった。

「いつの間にって、あんたがアへアへ乳首弄っている間、こっちはずぅっとカメラ構えてたってのに……オナニーに一生懸命でカオちゃんさん一回も気付きませんでしたよねぇ。ほらまだまだありますよぉ？」

店員が画像をスワイプしていく。

次々現れては流れていく、店内で痴態を晒す式部の画像。どれもこれも清楚なその顔が見事なまでに崩壊し、性を貪る餓鬼のようにアへり笑っていた。画像内の式部は乳首を引っ張り、乳房を紡錘型になるまで変形させ、悦に浸っている。その顔、その淫な肉体を見るだけで、熱い乳首が弾けるように跳ね上がる。

「ち、ちが……ッ♡ ちがうッ♡ こ、これはぁッ♡ そのっ♡ わ、わたしが率先してやったのでは……ッ♡♡♡」

店員の目がギラリと輝いた。赤く血の込められた指先が、セーラー服を突き破らんばかりの乳首をぎゅうと絞り、乱暴に引き伸ばす。

「ひッ、ひひひッ！　何が違うって言うんスか！　あんたは立派な変態メス乳女なんスよ……オラとっととイけって！　イけばわかるっしょ、ヒト前でイき顔晒すのがあんたの仕事なんスよ！　この変態露出狂女がよぉッ！」

「は、へ……んぉ♡ぉッ♡♡♡ おふッ♡ はッぎぃいッ♡♡♡ ふぃっ♡ いひぃあぁぁあぁぁあッ♡♡♡♡♡♡」

式部は口を押さえ、乳房を揺さぶり絶頂する。どくどくと豊満な乳腺が躍動し、沸る乳首に熱々のミルクを押し出した。引き伸ばされた乳首の先からイキミルクが溢れ出し、店員の手を濡らし、床に斑点模様を作る。

ミルクが滑り、店員の指が乳首から離れていく。それでも勃起仕切った乳首がミルクを止めることはない。式部がせめてもの抵抗と腕を乳房に押し当てようと、コリコリと硬くなった乳首からは甘いミルクが染み出し続け、セーラー服にミルク染みが広がっていく。

パシャリ、と店員がシャッターを切った。式部の痴態を保存して、それを式部へと突きつける。

そこにはセーラー服をびっしょり濡らし、汗だくの身体に貼り付けた変態女が写っていた。間抜けに厚ぼったい唇をひん曲げて、舌を跳ね上げて叫んでいる途中の顔は実に恥ずかしい。乳輪までくっきりと浮かび上がった乳首はといえば、店員にこれでもかと捻られて不細工に歪んでいた。

紛れもない数秒前の紫式部本人だ。サーヴァントとして、英霊としての誇りを何一つ感じない、ただ快楽に呑まれたマゾメスが、今の式部の全てだった。

「こんなに力ずくでイかされてんのにこのアへ顔……あんたはもう十分に変態女なんでしょ？　生まれつきの変態じゃなきゃ今の乳イキはできませんって」

生まれつきの変態。その言葉がじわりと脳を侵し、疼く快感として広がっていく。

どろりと式部の中に残っていた「何か」が溶け崩れる。身体中から熱が抜け落ち、一瞬にして身体中が冷えていく。

そしてその直後、ふつふつと内側から新たな熱が湧いてくる。身体を支配し、手足に広がり、脳へ、乳首へ、ディルドを咥えたヴァギナやアナルへ、生まれ変わった熱気が式部の隅々に行き渡る。

ふぅふぅと身体の痺れに身を委ねる式部、その乳の上に文庫本が乗せられた。本一冊程度ではたゆみもしない乳袋に、男たちから「おおっ」と声が上がる。式部はゆっくりと、ミルクで湿った本を取り上げた。背徳感に顔を蕩けさせる少女のイラストと、乳を振り乱して荒く息する自分とが重なり合う。イったばかりの乳首がもう、きゅんきゅんと縮こまる。

「そんで？　カオちゃんさん。ちゃんと教えてくれるんスよね？　コイツの使い方……ふひッ」

「は、はい……か、かおるこのえ、えっちな変態おアソビ♡　み、皆様にもッ♡　みていただきたいです……ッ♡♡♡」

男たちが乾いた唾を飲む。店員が満面の笑みで頷いた。

紫式部の精神に根付いたマゾヒストの種、被虐される喜びは、強制されずともひとりでに式部の口から溢れでる。自らの言葉で、自分を惨めな快楽へと堕とすのだ。にへらとだらしなく開いた式部の口は、虐げられる快楽に満ちていた。

恥ずかしさが常に頭蓋の中をかき回し、快楽物質だけが脳を支配する。羞恥に震える身体は、より強い屈辱を渇望し、式部の口から更なる惨めさを引き寄せようとする。

「へェ～それじゃ、うちらもせっかくなんで見てあげますよ。変態カオちゃんさんの公開オナニーショー。ふひひッ、せいぜい頑張ってくださいね？」

「はいッ♡　あ、ありがとうございますぅッ♡　か、かおるこッ♡　頑張っておなにいさせていただきますッ♡」

ゾクゾクゾク。「おなにぃ」の一言で、式部の背筋に悦が駆け上る。乳首がトクトクミルクを溢し、ディルドが詰まった穴がぎゅうぎゅうと収縮する。肌を流れる汗の一雫すらも敏感に受け止める肉体が絶頂ではち切れそうだ。

「ふッ♡ んふッ♡ そ、それではぁっ♡『地味系ドスケベ図書委員長の』♡『淫乱、露出アソビ』……は、初めまぁすッ♡♡♡」

言葉を発するだけで四肢に響く絶頂電流。式部は快楽の坂を転がりながら、染み渡る絶頂に身を委ねる。もはや正常な思考は残されていない。

マゾ露出に目覚めた紫式部の顔は、観るに耐えない溶け具合。だが禁断の悦を知ってしまった故の、一皮剥けた笑顔を浮かべていた。

◆

「はぉッ♡ おッ、おーッ♡♡♡ るッ、る、『るりかは』ぁーッ♡♡♡ はぁッ♡ んッくぅうッ♡『世界に晒されェ、硬く』うッ♡ かッ『硬く尖った乳突起を摘みあげ』ぇッ♡『戒めのように握りつぶ』ーーーふぉッ♡♡♡♡♡♡おッ♡ イくーーーッ♡♡♡♡♡♡」

ぱたたたっと紙面に白い水滴が飛ぶ。式部自らが絞り捻った乳首から吹き出した白濁ミルクが本に降り注ぎ、そして染みとなる。ヘソを見せつけるかのようにのけぞってアクメした式部は、デカ乳首で男たちの視線を惹きつけさせて、ぶりんぶりんと揺さぶった。自身のミルクで手を濡らし、ちゅこちゅこ嫌らしく音を立て、式部は本の世界と同様に乳首オナニーに身を焦がす。

赤く火照った女体を穴が開くほど凝視して、男たちは式部のオナニーを脳のシワに焼き付ける。次第に小さくなる人の輪は、式部が飛ばす汁が降りかかる程にまで縮小していた。ガニ股ポーズで乳首を捻る美女の図など、いかな古文書にだって描かれたことはないだろう。それを熱気すら届く距離で鑑賞することなど、滅多にない経験だ。男たちは開けた口を閉じることも忘れ、時には瞬きすらも惜しみながら、式部の痴態を心ゆくまで鑑賞する。

「ホラ、イきっぱで読む手が止まっているっスよ。ハイ、10秒読まなかったので30秒読むまでバイブ強めま～す」

「はふッ♡ はふッ♡ ま、い、今読みましゅッ♡ まだだいじょぶひゅぉおッ♡♡〜おッ♡♡♡

脳内に吐き出される絶頂という名の麻薬。視界を埋め尽くし四肢を脱力させるその魔力に抗いながら、式部は文字列に齧り付く。自らの意思とは無関係に絶頂を詰め込んでくるディルドによって、肉体の芯がアクメを常なるものとして受け入れ始める。開いた手が勝手にマゾ乳首を虐めだし、熱くしこり勃った肉豆に爪を立て弾き潰し、心ゆくまで転がし遊ぶ。

だらだらと唇から涎が伝う。だが片手は文庫本を、片手は乳首を虐めるのに一生懸命。式部の口元を拭ってくれるものなどここにはいない。じっとりと湿った文言を吐き出すたびに舌が絡まり、気を緩めればアナルから突き上がる絶頂に視界が染まる。

「はい30秒、カオちゃんさん今の顔めちゃよかったっスねぇ、後で写メ見せたげますから」

店員がそう言って、振動を「弱」へと引き下げる。だが、神経が弾け続ける式部にはそれが本当に30秒なのかなどわかるはずもない。1分を越えたのか、はたまた飽きて20秒で止めたのかも店員だけが知るところ。紫式部にそれを意見する権限など存在しない。

言われるがままバイブで喘ぎ、オナニーでアクメすればいいだけの奴隷だった。

「ふぅー♡♡♡ ふぅー♡♡♡ ふぅー♡♡♡ ふぅー♡♡♡ はッはっ♡ 『「仏縞（ふつしま）」耳が飛び上がる』ぅッ♡ 『鼓膜が、ふ、震えぇ』ッ♡ 『パンツ越しにぃ』ッ♡ 『秘芯がむ、むくりと勃ち上がるのがわかった』……ッ♡♡♡」

「ひひッ、ふひッ、なんスかぁ？　バイブ弱くしてあげた途端に音読で感じ始めるんスね。やっぱカオちゃんさん最高にオナニー中毒アクメ豚っスよ」

店員の嘲るような「ひくわー」の声を振り切って、式部はクリトリスへと指を重ねる。式部の身体はアクメを乗り越え、新たな快楽を貪るべくふつふつと熱を溜め込み始めている。バイブの刺激が弱まれば、今度は文字列から絶頂を組み上げるしかない。物語の進行に合わせ、主人公の動きをトレースし、勃起クリトリスを弄るのだ。ひと時の休みすらも惜しみ、式部は悦楽のために手足を動かす。

「おッ♡ くりとりひゅッ♡♡♡ ひゅごッ♡ ちゅこちゅこひゅごぉッ♡♡♡ 『るりかは』アッ♡ 『恐る恐る手を下着へと押し当てて』……ッ♡ ンッふ♡ ふッ♡ ふほッ♡ 『硬いクリトリスを撫で』でへぉッ♡♡♡ おッ♡ ぷくぉおぉほぉお

おおぉ おぉ ぉッ♡♡♡♡♡」

バイブが深く挿入されることも厭わずに、式部はその長い指先でクリトリスをこねくり回す。子宮を貫き臓腑を飛び抜け、式部の脳髄へ鋭いアクメが何度も駆け上がる。

物語ではほんの僅か、恐る恐る指先を触れさせた程度の描写だろう。

だが、アクメでスカスカになった式部の脳は、隙間を埋めようとアクメを催促し続ける。身体の内側から届くバイブ音に鼓膜がイかれ、振動のままに脳を揺さぶる。自ら放つミルクの芳香が鼻腔を埋め尽くし、舌の上にも甘ったるいメスの味が広がっていく。視界に飛び散るアクメの花火は式部の身体から重力を忘れさせ、時折見える雄たちのにちゃついた笑顔だけが式部を世界に繋ぎ止めていた。

油ぎった笑顔たちに見守られ、式部はぐちょぐちょと一心不乱にクリトリスを擦り続けた。

かいてもかいても熱い汁がパンツの端から溢れ出し、式部の指に絡み付いてくる。パンツの荒い裏地が顔を出した快楽神経豆を乱暴に摩擦し、一往復の擦り上げだけでもう、式部の脳に快楽火花が飛び散った。

「ふひッ、みろよアレ。クリちゃん虐めるのに夢中になって全然読めてねェじゃん・・・・・ッ！」

「マジやべぇ。おっぱいってあんなサイズになると本当にぶるんぶるんするんだな」

「てか、ゲホッ、げッほ。メス臭ってヤツ？　濃すぎてむせんだけど」

「カオちゃんって言ったっけ？　こんだけ見られててあんな全力でオナれるって真正の露出狂いってことジャン」

「ふひぃッ♡ ひぃッ♡ しゅっ♡ しゅみまひぇんッ♡♡♡ か、かおりゅこぉッ♡ ろしゅつきょうれぇッ♡ く、くひゃくでぇッ♡ ごめんなひゃッ♡♡♡ ごべンなしゃひッいいいッ♡♡♡♡♡♡♡」

自らの嬌声に混じって、男たちの突き放すような暴言が脳に刺さり込む。式部の身体を、体臭を、貶して踏みつけて唾を吐くような鋭い言葉たち。

式部は「ごめんなさい」を連呼して、神経を逆立てるその快楽を受け止める。より汚く下品な言葉を吐きかけられるほど、開け広げた足元に飛び散る汁の量は増え、ビリビリと芯に響く快楽も高まっていく。押し潰されるクリトリスが「もっと激

しく」とばかりに勃起を強め、指を押し返してくる。虐げられるこの現実全てが、紫式部の身体を絶頂させんと圧してくる。

「なァにだらだら謝ってんスかぁ？　うちらは「読め」ッて言ってんですけどぉッ！　おらペナルティっスよ。ま〇ことアナルで反省してくださいよッ！」

店員がリモコンのメーターを引き上げる。中を超え大を超え、「極大」の振動が式部の肉穴で目を覚ます。

ぶびっ！　ぶじゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅじゅッ♡♡♡

ほッ♡♡♡ アクメさせへいただきましゅッ♡♡♡ ひォッほぉ おッ♡♡♡ おーーーーーーッほおおおおぉおおおおおおぉおおおおぉぉ・・・・・ッ♡♡♡♡♡♡♡」

全身から体液を振りまいて、紫式部は露出オナニーをフィニッシュする。構えたスマフォへと夥しい水滴が撒き散らされる。乳房が跳ね上がり、尻肉が揺れ、太ももがぎゅうと引き締まる。白い肢体が絶頂に硬直し、伸びあがる声が掠れ途切れる。ごぼり、とパンツの隙間からアクメ汁が溢れ出た。

店員がバイブの振動を停止させ、これまで堰き止められていた愛液が流れ出したのだ。

もわりもわりと白い空気が立ち登る。とびっきり濃厚なメス臭を含んだ湯気が式部の肉体から吹き出し、カメラやメガネを曇らせる。

「お〜〜〜ッ♡♡♡ぐふぉ おーーーッ♡♡♡ んッ、ぐふッ♡♡♡ ふぶふぉおぉぉ・・・・・ッ♡♡♡」

肉を振るわせてアクメ脳を口から吐き出す紫式部。くるりとひっくりかえった眼球には絶頂中毒のアへ顔が浮かぶ。えへらえへらと口元はニヤケ続け、脳神経に溢れた快楽物質のトリップは止まらない。身体から乳房が滑り落ち、だらしない乳袋が左右に垂れる。清楚のカケラもなく開け広げた股の奥で、アクメ汁が泡を立てているのが見える。

心の殻を脱ぎ捨てて、脱ぎ捨て過ぎたマゾメスの生誕の瞬間だった。

◆

「はーいカオちゃん、読み上げてー」

「は、はいッ♡んんッ・・・・・ふぅ♡」

M字開脚で濡れた股間を晒し、紫式部はだらしなくピースサインを出した。黒髪の美女がするにはあまりにも淫らなポーズ。だが、自らのアクメ汁でぐっしょりと濡れきったその身体には、見事なまでにフィットしていた。

はーい
カオちゃん読めるかな？
はい♥
タイトルはぁ：
『リゾートで発掘、
爆乳女の秘密に迫る！
香子のエロボディは
見られるほどイっちゃう
変態ボディ♥』でぇっす♥
いっぱい
がんばったので…
みんなシコシコ
してね♥♥♥
はー
ぴーす
ハッ
はぁ
はぁ
ハッ
ハッ
ハッ

長いアクメから意識を取り戻した式部を待っていたのは、大勢の男たち。店員に客に、どこでスタンバイしていたのか撮影スタッフたち。式部の痴態を隅々まで記録してきた連中が一同に会し、式部を見下ろしていた。

「コレ読んで。このショットが最後だけど・・・・・ある意味一番大事だからねぇ」

男優がスケッチブックにセリフを書き殴り、式部へ差し出した。

その文言を見た瞬間、式部の身体はまたむくりと炎を灯してしまう。アクメ疲れた肉体が、再び熱く滾り出す。

紫式部は、誰に言われるでもなくM字開脚を披露する。自らが恥ずかしい姿を見せるほど、身体に帰ってくる快感が大きいことは今日という日が教えてくれた。へらへらとゆるい口で笑顔を作り、言われた通りの文言を口にする。

「か、かおるこちゃんのデビュー作っ♡ タイトルはぁ・・・・・『リゾートで発掘、爆乳女の秘密に迫る！　香子のエロボディは見られるほどイっちゃう変態ボディ♡』でぇっす♡ い、いっぱいがんばったので・・・・・み、みてねぇ・・・・・ッ♡♡♡」

客と店員が音のない拍手を送る。スタッフたちが満足げに頷いた。

「ふッ♡ ふッ♡ ふひン・・・・・ぅッ♡♡♡」

ゾクゾクと背筋を振るわせて、爆乳のエロボディ女は股を濡らす。

嵌まり込んだ沼に底はない。落ちれば堕ちるだけ沈んでいく無限の闇だ。

「はいオッケ。カオちゃんよかったよーさっきのお買い物！　休憩したら出演料と・・・・・次のヤツのコト、話そっか」

男優が手を叩いて歩み寄ってくる。差し出された分厚い手のひらは、深みへ誘う悪魔の手。

「・・・・はいッ♡♡♡」

式部はその手をしかと握る。ぎゅう、と締め付けられるオスの圧に、どくどくと身体を火照らせて。

エピローグ

ねっとりと、肌に張り付くような夏の空気が辺りに漂う湖畔の森。じょうじょうと輪唱するセミの音に混じって、何処からともなく子供たちのはしゃぐ声が響いてくる。肌を刺すような日差しは、こうして木々の間に隠れていてなお、葉の隙間から熱く落ちてくる。吸い込む空気は、土と水と植物の香りがした。

周囲に幾つもの施設を保有するこの湖は、連日多くの観光客が足を踏み入れる一大トラベルスポットだ。涼を楽しむ湖をセンターに据え、博物館かと見間違うような超巨大エキサイト・マーケット、何処までも広がる大自然を鑑賞できる高級ホテル、花火・フィッシング・バーベキューとアウトドアイベントを網羅できるコテージ等々、あらゆる夏の遊びを提供してくれる。

その盛況具合は著しく、人の集まる場所からは少し外れた森林の中にいてもなお、あちこちから人々の笑い声が届くほど。

「おい、本当にここで合ってんのか？　確かにそこらに水着のねーちゃんが歩いていて目の保養にはなるけどよ……外装が映っていなかったからイマイチ判断ができないぞ？」

そんな特大リゾートの一角に、ソワソワと辺りを見回す男二人組の姿があった。家族連れやカップルでの来場者がほとんどを占めるこの場所で、水着姿でもない男ペアは珍しい。男たちはスマホの画面と周囲の景色……特にマーケットの様子とを見比べながら、何かを探しているようだった。

「いや、間違いない。ホラ見てみろよ……この建物の形と森のシルエット。この角度から見ればなんとなく似ている……気がするだろう？」

「……いやぁ、言われてみればって感じするけど、どうだかなあ。あの噂……露出狂の爆乳女ってヤツがあったから来たんだけどな。このカンジじゃあ誰かが流したガセなんじゃないか？」

熱心に写真と風景とを見比べる男と、いまいち乗り気でない様子の男。スマホに映っているＤＶＤのパッケージ写真を、指で拡大した。奇抜な黒いデザインの水着を纏ったグラマラスな美女が、少々ぎこちない笑顔でピースサインを浮かべている。

否、パッケージであろうとも誤魔化せない。水着にくっきりと存在している膨れ乳輪に勃起乳首。むっちり太ももの間を除けば、剃り上げた産毛の跡やとろりと汁を溢すワレメが浮かんで見える。彼女が纏っているのは布地ではない。素肌に絵の具を塗りたくり、どこかのマーケット前で露出行為に耽っているのだ。

ＤＶＤのタイトルは……『リゾートで発掘、爆乳女の秘密に迫る！　香子のエロボディは見られるほどイっちゃう変態ボディ♡』だ。

「超新星女優のカオちゃん……クッソォッ！　絶対ここなんだっ！　このレベルのリゾートなんてそうそう日本にはないはず……もっと中入って探すぞぉ！　俺はカオちゃんの生デカパイをこの目で見るまでは帰らないからなっ！」

「おいおい待てって！　確かにカオちゃんの撮影に遭遇できたら最高だけどさあ。男優まで全部現地スカウトの秘密撮影だってのに……」

男たちは興奮に顔を熱くさせ、マーケット内へと突入していく。彼らが探す魅惑のエロ肉ボディを誇る露出ＡＶのスターを目指して。

「ほら、この辺りのレジカウンターとかさ、商品陳列の順番とか！　こ、ここだろ？　缶ジュースチャレンジしたコーナー！　か、カオちゃんがウシチチばるんばるんさせた所……ッ！　あそこで何回チンコが枯れたことかッ！」

「わかる、俺もあのシーンループしてるわ……って、そうじゃねえって！　レジとか陳列とかってどの店舗も一緒だろ？　店内見ても余計混乱するだけだってよぉ」

缶ジュースコーナーで（一応声は抑えつつ）ケンカする二人。スクリーンショットした動画内の様子と風景とを再び見比べる。だが、確かに商品のラインナップ変更や看板の移り変わりで「なんか似てそう」の域を出ない。

加えて、周囲には観光に来た普通の客も歩き回っている。水着姿での入店も許可しているせいで、（目的には及ばずとも）

非常に目の保養になる景色が二人の集中力を削いでいくのだ。視界の端にビキニ姿が映る度、男たちは声を殺してそちらを凝視する。そしてその都度、狂気迫った二人の視線に驚く一般客がそそくさと離れていくのだ。それを何度も繰り返すうち、やる気だった方の男もいい加減現実を理解し始める。

「く……やっぱり噂は噂だったってことかよ」

「そうそう。都市伝説にもなってるけど、時間の特異点みたいな場所に出現するトクベツな時空にある……とか思っていた方がマシだろうよ」

項垂れる相方の肩を叩き、「湖で目を癒して帰ろうぜ」と出口を指さす。夢が潰えた男はゆっくりと頷いた。スマホを握りしめた手を振り上げ、悔しげに吠える。

「くッそぉお，ッ！　カオちゃんっ！　俺のチンコに寄り添う天使ちゃんッ！」

「……ひゃぅっ!?」

背後で小さな悲鳴が上がった。同時にカシャンカシャンと何かが床を滑ってくる。

プラスチックの薄いケースが、男たちの足にコツンと当たった。何気なく、二人はケースを見下ろした。そして、全く同時に硬直する。

巨大なバナナボートの上で、乳房どころか乳輪すら隠せていない紐のようなビキニを纏った女性が笑っている。黒い髪を後ろで纏め、纏めきれない前髪が頬にぺたりと張り付いている。

「これは……ッ！　カオちゃんの最新ＡＶッ！」

「『水溶けマイクロビキニチャレンジ！　外れたらその場で即レイプ……でもわたし（香子）のおっぱいにはちいさスギ♡』のＤＶＤじゃないか！　え、で、でもコレはまだ製品版は発売していないはずなのに！」

我先にとケースを拾い上げ、二人で顔を付き合わせて裏丁を観察する。それは間違いなく製品版ＤＶＤ。まだ市場に出回っているはずのない、存在してはいけないＤＶＤ。

「こんなの……まだ制作スタッフしか持っていない代物だぞ!?」

「一体誰が……おと、して……？」
男たちは振り返る。背後で声が聞こえたはず。知り合いのいないこの場所で、幾度となく聞いた記憶のある、股間にずくんと響く声。
「あ、あのッ、すみま、せん……ついうっかり、お、落としちゃいましたぁ♡」
頭を下げる動作に合わせ、だっぷんと豊満な乳房が弾み上がる。ラメ入りスカイブルーのビキニから溢れ出しそうなギガ級バスト。蒼の布地の周囲には、赤く膨らむ乳輪が輪郭をなぞっている。
つつ、と溢れていく汗粒を追いかけて乳谷、へそ、そしてふとももへと視線が滑る。一瞬「履いていない!?」と瞬きする下半身。メス脂肪たっぷりのむっちり太もも肉が水着ヒモを飲み込んで隠していたのだ。恥部にぐいぐい食い込んでくる水着に責められ、柔らかな太もものシルエットを汁が伝い、足へと落ちる。
もぞもぞと落ち着きのない足を見た二人。血走った目を振り上げて、女性の顔を睨みつけた。
「ひンッ♡ あ、あのぉッ♡ しょッ、そんなに見られますとぉ……こ、こまり、ますぅっ♡♡♡」
アイドルのように飾り付けられた濡れ黒髪を揺らし、女性は頬を染めて目を逸らす。憂い美人という言葉を具現化したかのような美貌が、男たちの目の前で頬を染める。垂れ目はもじもじと落ち着きなく動き回り、潤んだ唇が恐る恐る口を開いた。
「そ、そちらのＤＶＤ……ッ♡ わ、わたしの最新作、なんですっ♡ い、いかがですか……？」
わたしの、と男たちは改めてパッケージを見る。マイクロビキニを着せられていっぱいいっぱいな笑顔を浮かべる彼らの天使と目があった。
顔を上げ、目の前の女性の顔を除く。パッケージに映っていた顔と瓜二つ……否そっくりそのままの美貌が、湯気が立つほど顔を染め上げてこちらを見上げていた。
「か……ッ、ウソだろ……！」
「カオちゃッ！　本当にココが！」

生き別れの家族と対面したかのようなリアクションで、男たちは口に手をおいた。ぴろぴろと汗を飛ばす紫式部へと、震える手でＤＶＤを差し出す。式部は前髪をかきあげ、乳房を揺らしてＤＶＤを受け取った。

その時だ。

「ひゃッ！　あ、すみませんっ」

がしゃがしゃと音を立てて、式部が持っていた買い物カゴから商品が溢れ出す。元々限界一杯に詰め込まれていたのだろう、男たちの足元へ、山のようなオモチャが広がった。鮮やかなその情景を、二人は呼吸も忘れて見下ろした。

『マネキンものまね初体験！　ボディペ露出狂女はバコられても我慢できるのか……徹底検証！』

『変態ハウスキーパーのエロ巡回♡ノーパン爆乳スタッフがお客様のカラダまでキレイにします♡』

広がるＤＶＤパッケージに映るのは、どれもこれも式部が表紙を飾るものばかり。香子と呼ばれる露出ＡＶ女優の大ヒットシリーズだ。日本の何処かにあるリゾート施設をふんだんに使った露出プレイが好評を博し、次回作の発表が期待されている。

「あっ♡ごめんなさいッ♡わ、わたしどんくさくって♡はぁっ♡んぁっ♡い、今拾いますからぁッ♡」

男たちの目の前で這いつくばり、尻を揺らしてＤＶＤを拾い上げるこの女の痴態がたっぷり詰め込まれた映像作品という訳だ。男たちはゆっさゆっさと暴れる肉を凝視する。そしてゆっくりと、カゴから溢れた他のアイテムを見回した。

どこかで見たことのあるマイクロビキニは、何故か既にローションで濡れていて、持ち上げるとぐじゅりと音がなった。棍棒かと思ったそのオモチャは、馬のペニスほどもある極太極長ディルドだ。

ディルドと並んで、大根やらキュウリやら、長くて太い野菜類がピンクのゴム質の袋で一本一本パッケージされて転がっている。

絞りの甘いタオルのように見えるソレは、どうやら汁まみれのふんどしの様だ。

男が手にした露出モノのエロ文庫は、何かの汁に漬けられていたのかふやけて紙がボソボソだ。

どれもこれも、初めて手に取るような淫具ばかり。だが男たちにとっては初めて目にするモノではない。

「こ、この野菜って『全裸チャレンジ農業編』でアナル捕食した時のカオちゃんけつアクメ殿堂入りキュウリ……ッ」
「うぅむ、もしかして『マイクロ法被でお祭り潜入大作戦』でカオちゃんのおまんこに食い込んでいた収縮性ふんどし！」
「あ、あぁッ♡ お、おふたりともわたしの……ッ♡ え、えっちな姿、見てくださっているんですね……ッ♡♡♡」
男たちがオモチャを取り上げ呟く度、式部は恍惚の表情で身を震わせる。ムクムクと空色ビキニが尖り出し、乳首テントが乳房を彩る。もぞりとすり合わせた太ももが、自らの汁でぬちぬちと喘いだ。
「あ、のぉッ♡ 実は、わたしぃッ♡♡♡」
喘ぎ混じりの式部の声に、４つの見開いた目が向けられる。そんな二人へ、式部は震える手でＤＶＤの束を差し出した。
「お世話になっている視聴者様にぃっ　……え、選んで、い、いただいた企画を再現させていただくというモノをッ　さ、さつえいッ♡ しているのですが……ッ♡♡♡」
男たちは顔を上げた。式部の背後に立ち、カメラをひっそりと構えたスタッフらしき男たちと目が合う。
「もしよければぁ♡ お、お二人のッ♡ イチオシ変態カオちゃんを選んでほしいなぁ……ッ♡♡♡」
今にもアクメしそうな蕩け顔で、自らが映ったパッケージを広げる式部。刺すように向けられる雄の視線に乳首をおっ勃て、ぞわぞわと込み上げる快感に脳を蕩し、にへらと笑う。汗ばんだ肢体を見せつけるように身をくねらせ、ＤＶＤを持った手をむにゅりと乳房に沈ませる。最も心臓が詰まるような、羞恥に身体が燃え上がるような言葉を選び出し、潤んだ唇に乗せて送り出した。
「みんなのためにぃッ♡ かおるこぉ、ガンバってもう一回変態シちゃうぞぉっ♡♡♡♡♡♡♡」

本作品を最後まで読んでいただきありがとうございます。重ねてFANBOXでの多大なるご支援、ありがとうございます。

作者のさざんか ひさしです。

昨年夏から、イラストを描いてくださった新生さんとのちょっとしたゲームから始まった紫式部のエロSSでした。あれこれ妄想を重ねるうちにボリュームアップが続き、どうせならちょっと長めのを書いてやれ、という思いつきで本作は出来上がりました。

同人誌を作ってみたいというFANBOXでのちょっとした目標の一つが達成された形となります。感慨深さよりも右手首の痛みが勝っています。あれだけ事前準備をしとこうって僕言ってたじゃんね。こうして書いている最中にも訂正に二日はかかるミスを発見しました。「よっし完璧」とか一昨日あたり言っていた気がするんですがね。ま、本編には影響しない所なのでそのまんま投げちゃいます。次だ次、次の同人誌でミスらなきゃいんだよ。

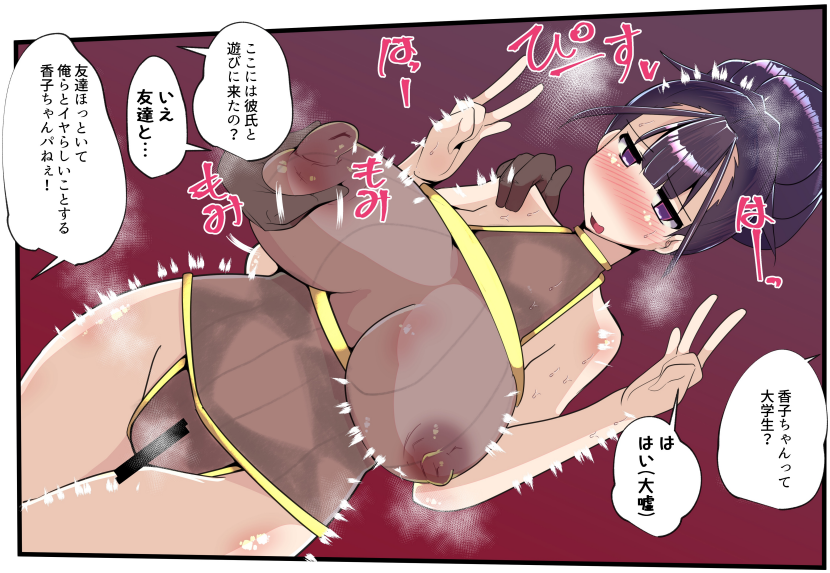
閑話休題。そろそろ2周年も近付いてきたFANBOX、皆様の長きに渡るご支援のおかげで、僕は今日も真面目な顔してエロい妄想を続けられております。この場を借りて感謝申し上げます。

今後もFANBOX限定シリーズ、先行公開作品、pixivリクエストに同人誌造りと幅広い活動で皆様にエロを提供していきたいと考えております。末ながいお付き合い、よろしくお願いします。

さざんか ひさし

著者　さざんか ひさし
pixiv : https://www.pixiv.net/member.php?id=2467259

イラスト　新生T 様
pixiv : https://www.pixiv.net/users/867559
twitter : https://twitter.com/tk01397909?s=20



紫式部　羞恥の露出AV初体験　下

発行日　2021 年 4 月 9 日

著者　さざんか
https://www.pixiv.net/member.php?id=2467259

新生T 様　（イラスト）
https://www.pixiv.net/users/867559

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。